Story5

造船所と日の丸

江戸時代、各地の大名の勢力を制限し、
幕府の安定を維持するため、
「大船建造禁止令」が制定されました。
そんな中、「黒船」に代表されるように
西洋列強が東アジアに進出するようになります。
島津家二十八代当主島津斉彬公は
「海からくる敵は海で防ぐべきである」と考え、
桜島の瀬戸・有村、垂水の牛根に造船所を設け、
洋式軍艦の建造に取り組んだとされます。

写真右：日本の近代造船建造のさきがけとなった造船所跡
写真左：第二次世界大戦末期に指宿の航空基地が空爆を受け、辺田集落内に空軍基地を写した様子

船の建造にあたり、幕府の「大船建造禁止令」の手前、周囲には高く筵を張り住民の目から遠ざけて、交通や他言を禁じたといいます。
幕府は、嘉永六年（１８５３）、ペリー艦隊（黒船）の浦賀への来航を契機に海防の必要性に気付き、斉彬公の提言を受けて大船建造を解禁しました。斉彬公は大型帆船・蒸気船あわせて十五艘の建造を計画し、瀬戸で昇平丸、有村で大元丸・承天丸、牛根（脇田）で鳳瑞丸、万年丸が建造されました。この地での軍艦建造は五艘で終わりましたが、大隅半島と桜島の間の海峡のこの地は、日本における近代造船発祥の地となりました。
斉彬公は、幕府、諸藩が洋式帆船を所有することになったことから、日本の船と外国の船を区別するため、白地に赤い「日の丸」を掲げるよう幕府に提案しました。これを受けて、嘉永七年（１８５４）七月九日、幕府は「日の丸」を日本の総船印と定め、安政二年（１８５５）春、幕府に献上するために鹿児島を出港した昇平丸に日本総船印としての「日の丸」が掲げられました。万延元年（１８６０）には国旗としてはじめて掲げられ、正式には明治三年（１８７０）に日の丸が日本の国旗になりました。大隅半島と桜島の間の海峡は、国旗「日の丸」の故郷でもあるのです。
平成二十四年（２０１２）、地元の有志により、たるみず道の駅「湯っ足り館」の敷地内に昇平丸のモニュメントが設置されました。